

汲古一七

— 講演より —
『書への途』(一)

中村素堂

私は社中のだれに対しても、その人が作品として書こうとしている詩歌や文章などのいわゆる文学について、そういうものを書いてはいけない、といったことは一度もない。どんなものでも自分の書きたいと思ったものを書かなければいけないというのが私の主義です。これは非常に大事なことで、どんな人でも自分が書きたいものだからこそ、書こうという意欲がでてくるわけでして、この自分が選択した文学を書くということが、作品を作る第一歩なわけです。

しかし、選択を尊重すると申しましたが、選ばれた詩や歌が、作品としては不適當だという場合がある。本人は非常に苦しんでいるのに効果のあがらない作品がよくある。これはつまり作品を拵える時に、拵えるためのコツというようなもの——こういう文学はこういうコツで書かなければならない。ああいうものを書きたい時には、こういう言葉のものがうまく適合するのだという選択上の用意が、どこかで間違っているのじゃないかということですよ。たとえば大変簡単な字ばかりあるものを大きく書こうとしたり、反対に画数の多い字の羅列を、狭いものに書こうとしたりするなどはその一例です。こう申しますと、しかし人からこれを書いてほしいと頼まれて、そんなことを考えておれない場合があるじゃないか、ということがあります。これはいたし方がない。画数の少ない字ばかりの句、月の字ばかり何度も出てくる詩を頼まれた場合だつてある。それは当然それに対する苦心をして何かと作品化して見せる。そのために思わぬ勉強をしたりするということになります。しかし、自分のほうから進んで見てもらうための作品を書くとなれば言葉を選ぶ自由も自分にあるわけでより効果的な言葉の選択ということがまずなければならぬと思います。すなわち文学には惚れたけれども、そこにばかり重点をもつていつて、書に対する考慮が足りないために効果があがらない。やはり詩や歌を見た時に、これは作品になるなという字の選び方を確かに見逃してはならないと思います。そして選んだ言葉にはどういふ書体がふさわしいか、キャンパス—紙はどんなのがよいか、その場合墨色は、というようなことまで考えねばなりません。

んし、印の位置や色などにも考慮が払われねばならぬと思います。古人もこういうことには痛いほど神経を使っております。

本郷三丁目にあります「三原堂」という菓子屋の看板は、私の恩師武田霞洞先生が書かれたものですが、これは実に大きなもので、巾が二メートル以上ある。それを書かれた時を知っているのですが「茶を愛して酒を嫌わず」（愛茶不嫌酒）という落款を注文して作らせ、初めてこの看板に用いられました。この三原堂の看板は水天宮の前にある本店はもちろんのこと、神田駅前本郷等の、各店でもその文字を写して使用しているわけですが、本郷の三原堂のは、一字の字の大きさは変わらないのですが、大理石の大きさに合わせて字間を縮めてしまい「霞洞仙史」という落款もくっつけてしまつて見られたものではありません。これは作品の冒瀆です。三原堂などと、初めに三という簡単な文字です。そこで重量のある関防を押してパランスをとつた。先生がご自慢されるような関防を作つて押された。それほどのものをこんなに無神経に扱われたと、大変立腹された同門の先輩もいましたが、これは書作家として怒るのは当たり前です。作品にはこういう苦心の配慮があるわけで、それが長い年月のうちには作品構成上の大事な型となつて大きな効果を生み出すといったこともあるわけです。日本臨済宗中興の祖、白隠禪師という方はよく達磨大師を描きました。大抵達磨さんは横を向いていて、正面を向いているのは滅多に描きません。そうすると讚をします時は、達磨さんの向いている方が句の始まりで反対の方が終わりになります。字は右から左に向かつて書いてゆくのが普通ですが、いわゆる肖像の場合は顔の向いている方から背中にかけて書いてゆく。白隠も必ずそう書いております。実際に書いてみますと、そういうふうには書かないとおさまらない。顔が向いている方に句の終わりがきて落款がきたんじや確かに具合が悪い。これなども長い間かかつてやつと見つけた形式です。こういう形式をただ踏襲するということではなく、そのような形式の中にある効果について、どのくらい古人が苦心したか、その苦心に対して虚心になつて目を向けて見ると、われわれが作品を書いてゆく上で、新しい配合のよさを見つける手がかりとなるわけです。(つづく)